九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

「こをろ」の野遊び ： 事変下の「友達」交歓

花田, 俊典
九州大学大学院比較社会文化研究院教授

https://doi.org/10.15017/8343

出版情報：九大日文. 1, pp.73-89, 2002-07-25. 九州大学日本語文学会「九大日文」編集委員会
バージョン：
権利関係：

「こをろ」の野遊び

――事変下の「友達」交歓――

花田 俊典
HANADA Toshinori

ハイキングとピクニック

島尾敏雄の短篇「春の日のかげり」（「心の友」昭29・2）は長崎市郊外の唐八景（とうはっけい）に「ピクニック」（野遊び）に出かけた話である。島尾敏雄が長崎高商に在学中の昭和十二年頃の体験がモデルになっている。もう一つ、太宰治のエッセイ「貪婪鍋」（「京都帝国大学新聞」昭15・8・5）には、昭和十年代の「ハイキング」ブームの光景が揶揄的にスケッチされている。

素直に、風景を指さし、驚嘆できる人は幸ひなる哉。私の住居は東京の、井の頭公園の裏にあるのだが、日曜毎に、沢山のハイキングの客が、興奮して、あの辺を歩き廻つてゐる。井の頭の池のところから、石の段々を、二十いくつ登つて、それから、だらだらの坂を半丁ほど登ると、御殿山である。普通の草原であるが、それでも、ハイキングの服装凛々しい男女の客は、興奮してゐる。樹木の幹に「登山記念、何月何日、何某」とナイフで彫つてある文字を見かけることさへあるが、私には笑へない。二十いくつの石段を登り、だらだらの坂を半丁ほど登り、有頂天の歓喜があるとしたら、市民とは実に幸福なものだと思ふ。悪業の深い一人の作家だけは、どこへ行つても、何を見ても、苦しい。気取つてゐるのではないのだ。

御殿山は井の頭公園内の西方一帯の小高い丘陵地。大正六年五月一日、井の頭公園が郊外自然公園として開園した当初は、楢や栗や松などが「密林ヲナシ」、山百合や萩などが「趣キヲ添ヘ真ニ大自然ノ風趣深シ」（「井ノ頭恩賜公園案内図」説明文）といった光景だったらしいが、この太宰治のエッセイの当時はすでに「普通の草原」みたいに整備されていたようだ。

『東京の公園80年』（東京都公園協会、昭29・5）によると、東京府は昭和七年十月、近代都市計画策の一環として、内務省都市計画東京地方委員会のなかに内務次官を委員長とする東京緑地計画協議会を発足させ、昭和十年以降、市民の保健、休養、体育等に必要な自然公園や行楽道路その他の整備に着手している。「景園地の中、当時における一般市民の行楽に関する嗜好情況を勘案して統計的に最も利用度の高い御岳・高尾・大島の三景園地については自然公園施設として逍遙路、展望台、野遊場、遊歩場、天然及び産業教材園などが昭和一一、二年度に亘り東京府予算約二三万円を投じて設けられたほか、別に府の観光保勝委員会の議を経て助成金制度により地元においてヒユツテなどのレクリエーション施設を実施したものもあつたのである」。これ以後も東京府は、自然と調和した都市生活を享受する「地方計画」モデル事業を推

進。日中戦争開始後、政府は防空、防火対策上の見地からも、運動場、練兵場を含む緑地計画の必要を強調し、昭和十五年三月の都市計画法改正によって「緑地」が「公園」と同様に都市計画法上の施設として位地づけられることになった。

こういった行政の施策も手伝って、市民のあいだに「ハイキング」ブームがひろまっていったらしい。従来からある温泉観光案内書のたぐいも、この時期からは「ハイキングコース」を盛り込んだものが登場してくる。日本旅行協会（ジャパン・ツーリスト・ビューロー）編・発行『旅程と費用概算』（発売＝博文館、昭15・11第三十七版、前年10月刊の第二十七版も同内容）には、「伊豆ケ岳ハイキング」「武蔵国境峰の薬師ハイキング」「奥多摩ハイキング」「鎌倉史蹟めぐりハイキング」「鎌倉アルプスハイキング」「鷹取山ハイキング」「足柄峠金時山ハイキング」などの項目が掲げられており、電車・バス・ケーブルカーを利用しながら適度に軽く歩く程度の家族連れハンキング・コースもあれば、まる一日か二日をかけて千メートル近い山地を縦走する本格的なハイキング・コースもある。

さすがに井の頭公園内の御殿山に「二十いくつの石段を登り、だらだらの坂を半丁ほど登」るのは、およそハイキングとは称し難く、それでもブームにのって、「ハイキングの服装凛々し」く、まるで箱庭みたいな御殿山の頂上に立って、いとも手軽に気分を味わう市民の小さな自己満足ぶりを、太宰治は揶揄してみせているのだが、ただし「樹木の幹に『登山記念、何月何日、何某』とナイフで彫ってある」と言うに至っては、いつもの彼の演出効果のウソだろう。

どうやら日本のハイキング・ブームの起こりは、昭和初年代の後半あたりからであったらしい。今和次郎・吉田謙吉『モデルノロジオ』（春陽堂、昭5・7）には「井の頭公園春のピクニック」（初出は大正15年4月）の一文が見えるが、これは「花見時の人出のありさま」をモダン語で「ピクニック」と称したにすぎない。吉沢義則『吉沢新辞典』（博多成象堂、昭6・3）には「**ピクニック** Picnic 名 食料を持って遊山すること。行楽。野遊。」とあるが、ハイキングの項目はない。小山湖南著『和英併用 モダン新語辞典』（金竜堂、昭7・9第五版、初版は昭7・1）にも「ピクニック」の項目はあって「ハイキング」の項目はなく、「**ピクニツク**（英 Picnic）【日】遊山、野あそび。」と説明されている。喜多壮一郎監修・麹町幸二編『モダン流行語辞典』（実業之日本社、昭8・1）には両方の項目ともあり、「**ハイキング** Hiking 英／テントをかついで山野に野宿しながら、自然を友に足に任せてする徒歩旅行の意。英国人は今やこのハイキングに熱中してゐる、若きも老人も、男も女も。」「**ピクニツク** Picnic 英／郊外散歩、遊山、野遊び。」とある。『新修百科辞典』（三省堂、昭9・3）には、「**ハイキング**（Hiking）若干の旅具を用意し、テントを携へ、家族・友人など数人連れ立つて、自然を友に山家を跋渉する徒歩旅行。諸外国では近時一つ（ママ）のスポーツとして大に行はれやうとしてゐる。」とあるが、「ピクニック」の項目は見えない。以下、三つの辞典の項目説明を列記しておこう。

◇『新修百科大辞典』（博文館、昭9・4）

ハイキング（英）Hiking［運］「仲よく歩く」の意味をもつ英国

コーンウォールの古語から出た言葉。気の合つた友達が、若干の荷物を背負ひ、テント持参で泊りがけの徒歩旅行をすること。原始生活への憧憬を以て、なるべく文明の利器に頼らず、山野又は海辺を跋渉し、大自然に親しむのが目的である。

ピクニツク（英）Picnic（娯）野遊び。菓子果物類、サンドウィッチ等を携へて野原、丘陵等で遊楽すること。

◇『学習百科辞典』（三省堂、昭9・9）

ハイキング　手軽な徒歩旅行のことで、気の合つた友達二、三人と共にリュックサックなどを背負ひ、山や海辺に日帰り又はテント持参の泊りがけの徒歩旅行を行ふものなどが之である。一つのスポーツとして行はれてゐる。

ピクニック　郊外散歩。遠足。（※巻末付載「外来語」一覧）

◇『国民百科大辞典』第十巻（冨山房、昭11・7）

ハイキング［（英）hiking］モト（英）コンウォール（Cornwall）ノ古語デ、《仲よく歩く》ノ意。即チ気ノ合ツタ友人二三人デ若干ノ荷物ヲ背負ヒテント持参ノ徒歩旅行ヲスル事。日帰リノモノヲオールディ-ハイク（all day hike）、泊リガケノモノヲオーヴァナイト-ハイク（overnight hike）ト称。此外、固定キャンプヲ中心トスルモノ、初メカラハイキング目的ノモノガアル。近年、我国デ、近郊散策・登山・遊歩・日帰リ旅行ナドノ意ニ濫用サレル。

要するに「ハイキング hiking」は、「登山 mountaineeing;mountaunclimbing」ほどハードではないものの、きちんと服装を整えて本格的に山野を「徒歩旅行」するスポーツの一つで、ときにはテントも持参して数日かがりで踏破する。一方、「ピクニック picnic」の日本語訳は「野あそび」。ただし、ハイキングとピクニックとは、しばしば混用されている。

ところで、さきの『旅程と費用概算』には関東一円の「ハイキング・コース」しか紹介されていない。編集部の事前調査が全国各地にまで及んでいなかったのであろうし、このブームが東京発信型の新文化だったと知れるが、これが国策と同時代思潮に絡んだブームであったからには、他の地方都市にも波及しないわけはなかった。

雑誌「九州山岳」第一輯（朋文堂、昭15・10第三版、初版は昭11・10）には、竹内亮の一文「『福岡市附近の遊山地』以後」が掲載されている。「私が雅友有吉憲彰君の勧誘に従つて、同君の主宰する雑誌『福岡』のため『福岡市附近の遊山地』を執筆したのは昭和六年の夏のことで、それが『福岡』の特輯号として出版されたのは同年十月のことである」。

昭和五、六年といふ頃は、福岡市附近の登山界に於ても記憶さるべき時であつて、その頃から漸く福岡市附近の山々にも比較的多くの登山者の姿を見かけるやうになつたのであり、大正十一年以来、附近の山歩きに没頭してゐた私にとつては、実に深い印象を与へられたものである。この間の動向をよく把握されたのは、福岡県の社会教育課で、当時専らその局にあたつて居られた吉村好兵衛氏（現福岡県社会教育会館

主事、福岡山の会名誉会員）の御骨折で、県主催の第一回登山講習会が近郊の若杉山で開かれ、私は日本山岳会の推薦で講師として出席、少数ではあつたが県下の選ばれた熱心なる登山同趣味者に、親しく接し得たことは非常なる仕合せであつた。

「福岡市附近の遊山地」を執筆する気になつたのも、また福岡山の会の前身とも見らるべき福岡山岳談話会を自力で開くに至つたのも、実にこの講習会に刺激されてゞあつた。

竹内亮はこう述懐し、「由来福岡の地は海に沿へる大都市である一方、山運にも可成めぐまれてゐる方で、筑紫山脈の第一高峯たる一〇五五米の背振山は、その南郊余り遠からざる位置にあり、都合よく乗物を利用し得れば、略半日で上下し得る程である」こと、さらに背振山塊の他の諸山や筑紫山脈中の三郡山塊にしても、「いずれも最近発達せる交通機関の利用によつて、半日乃至一日行程の一般向登山地として、多くのハイカーに、比較的気軽に登られてゐるのであり、この三、四年以来、従来閑寂な境地であつた山稜、山頂、渓谷等が休日にはともすると雑沓の地に化するに至つたのも、その間の推移を知つてゐる私にとつては、全く今昔の感にたへざるものがある次第である」と述べている。

月刊郷土誌「福岡」（福岡・東西文化社）の第52号（昭6・10）は、「福岡市附近の遊山地」と題する全53頁の総特集。「遊山」とはいうものの、内容は「日帰り登山」案内である。

さきの竹内亮の一文に戻ると、「昭和七年に福岡山の会が結成され、登山熱は次第に会を背景にして、近郊山地を対象として組織化され、従来ともすると一般的に危惧の念を持たれてゐた山々も、甚だ気軽なお隣りといつた程度になり、三、四年来近郊にも多少なりとも残つてゐた探検気分は、殆んど消滅したのである」。この「福岡山の会」の発起人代表を彼はつとめているのだが、つづけて「最近福岡県体育協会では『福岡県ハイキング・コース』なる小冊子を編輯出版した」というが、これは未見である。

こりよりあと、ポケット版の八幡製鉄所山岳部『北九州ハイキング案内 附九州著名山地コース』（朋文堂、昭14・12）が出版されている。同書巻頭の「はしがき」の前半のくだりには、こう述べられている。

銃後の吾々が祖国に報ゆる第一のものは何か。健康！ その健康こそ祖国の基礎となり、力となるのではあるまいか。毎日の繁雑な仕事から一日を開放されて、青空の下、丘から山へ、足どりも軽く、一歩一歩、健康を築いてゆく、それはまた興亜建設大理想への力強い歩調でもある。

かうした健康報国の精神を以て近来著しく普及されて来た登山、ハイキングに対して、北九州工業地帯の登山者、ハイカー、諸氏に近隣のハイキング地紹介の意味から、このさゝやかな小冊子を贈るものである。小さな道しるべ、手軽な案内書として、幾分でも諸氏の伴侶となり役立てば編者の欣幸とするところである。

もちろん、この文章の大半は、事変下の時局に呼応した型どおりの挨拶文にすぎない。けれども、この文章は同時に、ハイキン

グ・ブームが「健康報国」という理念のもとに同時代の思潮に合致し、雰囲気的に後押しされている事情を示していよう。美しい祖国、緑なす国土、健康な身体、自然との交歓、――明治開化期以来の西洋移入の都市型消費文化の悪弊を脱して東洋古来の精神文化の伝統に生きようと願う同時代にあって、ハイキングはどこか、国民の身体を鍛錬する新時代の若者たちの清新な香りを漂わせている。

「野遊び」の記録

事変／戦時下の文芸同人誌「こをろ」（福岡・こをろ発行所、昭14・10―19・4、全14冊）の同人たちが市内の文学少女たちと集団交際し、しばしば近郊の山や海に「野遊び」に出かけたことは、ひろく知られている。近藤洋太の評伝『矢山哲治』（小沢書店、平1・9）は、これをたんねんに調査し、「現在わかっているだけ」でも計六回の「野遊び」が確認できるとしている。同書の記載どおり、以下に掲げてみる（なお便宜的に通し番号を付けておく）。

〈1〉　十四年八月一日　名島へ海水浴　矢山哲治、吉岡達一、安河内剛、鈴木真、鳥井平一、佐藤昌康、横倉弘吉、山崎邦栄、広瀬信子らが参加

〈2〉　十四年八月二十一日　糸島郡長垂（ながたれ）海岸へ海水浴　男十人、女十六人参加

〈3〉　十五年一月六日　背振山へハイキング　矢山、鳥井、鈴木、吉岡、山崎邦栄・邦歌、久我正子、田中幸代らが参加

〈4〉　十五年八月　油山へハイキング　矢山、鳥井、眞鍋呉夫、阿川弘之、川上一雄、山崎邦栄・邦歌、久我、田中らが参加

〈5〉　十六年八月下旬　筑紫郡（ママ）耶馬渓へハイキング

〈6〉　十六年十一月上旬　立花山へハイキング　矢山、島尾敏雄、冨士本啓示、福田三千也、山崎邦栄・邦歌、久我らが参加

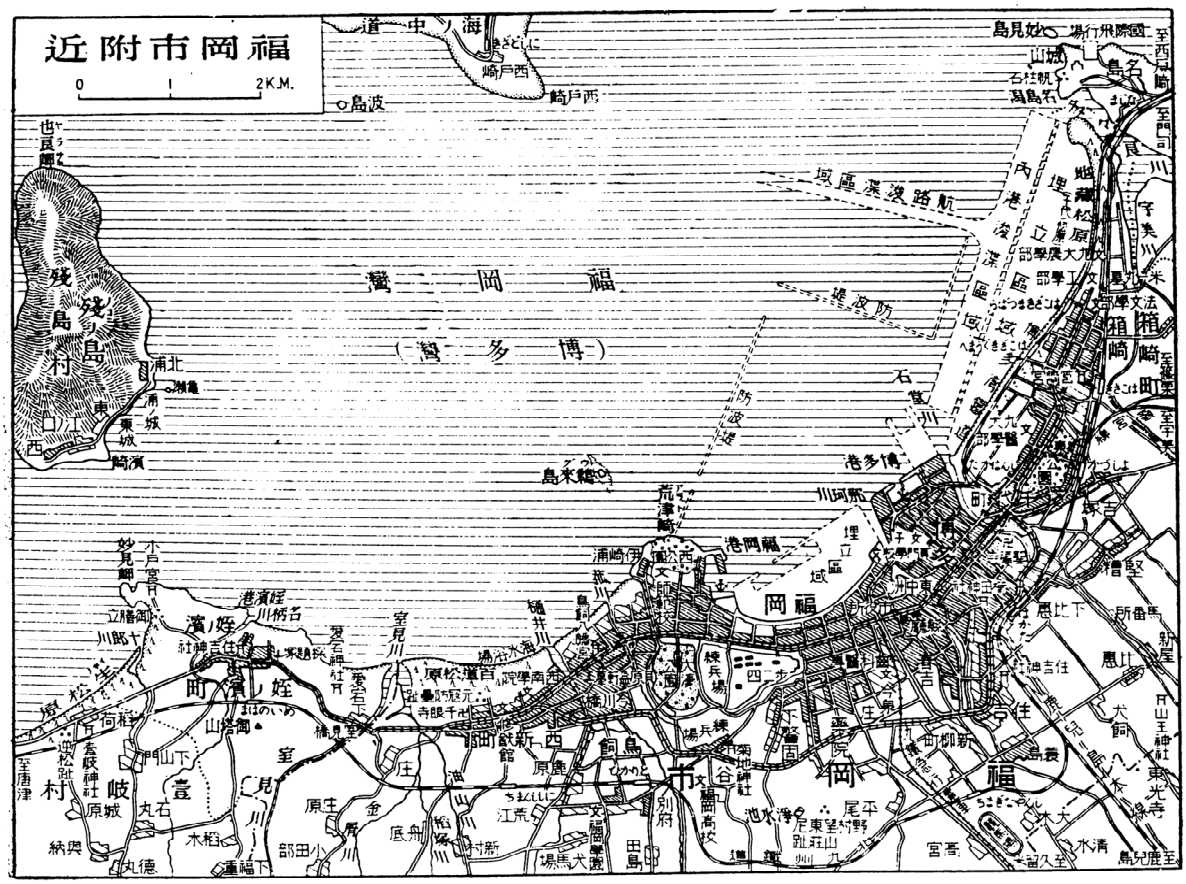
同書はこれらの確認の根拠を明記していないが、〈1〉は、松原一枝の伝記小説『お前よ美しくあれと声がする』（集英社、昭45・3）中の記述によっている。矢山哲治が旧制福岡高校（理科甲類）から九州帝大農学部に進学した昭和十四年の夏、福岡市天神（てんじんのちょう）町の交差点角にあった「生田（喫茶店）の二階」（「生田（いくた）菓子舗」天神町支店、本店は市内の東中洲）から出て来たところ、向こう側に小学校の同級生の「N嬢」（廣瀬信子）が友人の「Y子」（山崎邦栄）と連れだっていたので、交差点を渡って声をかけ、初対面の「Y子」を紹介してもらい、それから三人で近くの「森永」（「森永キャンデーストアー」）でお茶を飲み、「話のはずみから、こんど女性グループと男性グループを交えて、名島で夏の一日を遊ぼう」と相談が出来、それから二、三日中にもう一度詳しい打ち合わせをするので、N嬢とY子は矢山と会った。／そのときはN嬢は専ら聞き役になっていて、おもにY子と矢山が万事の手筈をきめた。参加者は矢山側からは『こをろ』同人で都合のつく者、女性はY子の女学校時代の仲良しとY子の妹の友だちと決まった」というのである。矢山哲治と親しかった松原一枝はこの当時は一家して東京に引っ越していたから、このエピソードは後年の山崎邦栄に取材して書いている。「男性側の名前が判っている者をあげると、

／矢山哲治　島尾敏雄　吉岡達一　安河内剛　鈴木真　鳥井平一　佐藤昌康　横倉弘吉／（略）戦時下であったから、若い男女がグループで行動することは憚られた。一行は別れて歩き新博多駅で集合した」。しかし、これだけでは日時が判明しないし、また、「名島」へ行ったというのも後年の山崎邦栄の記憶によっている。山崎邦栄（故人）は当時の「友達」交歓の写真を満載したアルバムを大切に保存している（末尾に「一月二十五日／鳥井平一氏／佐藤昌康氏／吉岡達一氏／より贈らる」と筆書きされている。「一月二十五日」は妹の邦歌の誕生日。この日記の一部は福岡市文学館設立記念展図録「カフェと文学」福岡市総合図書館文学・文書課、平14・5に紹介されている）。が、この山崎邦栄アルバムには「名島」での写真はなく、そして、日付についても近藤洋太が「八月一日」と断定する以上、何らかの根拠があるのだろう。眞鍋呉夫の小説「二十歳の周囲」（季刊「作品」2、昭23・11、のち創作集『二十歳の周囲』全国書房、昭24・6）に、「明日、皆で名島に遊びに行くんだが、来ないか？」と矢ケ崎（矢山哲治）から誘われる場面が出てくるが、これは「こをろ」創刊以後のエピソードであり、ここでの名島行きとは関係ないだろう。

〈2〉は、矢山哲治の昭和14・8・22田中稲城宛書簡（絵はがき）中に、「昨日は男友達10人、女友達16人と、十七、八から廿二まで廿六人ものおほぜいで、糸島の長垂海岸で、終日、はだかですごし、今夜はすこし体がほてります」とあることによっている。田中稲城は福岡県矢部村の古刹の歓喜山善正寺（真宗大谷派）住職の第二子で、大谷大学予科を中退して郷里で療養中、「文学会議」（久留米市）同人をへて当時は第二期「九州文学」（福岡市）の同人だった。八月二十一日は月曜日。「廿二」歳というのは矢山哲治の当年の数えどし。

〈3〉は、矢山哲治の昭和15・1・4鳥井平一宛書簡（封書）中に、「さて、六日遠足したいとおもひます。あの少女達のいくにんかの人達は嫁ぎますから、たぶん最後の集りになるでせうから博多に出て下さい。五日の晩、僕宅に宿ること。」とあるのをふまえている。鳥井平一は大正八年九月二十三日、戸畑市の生まれで、矢山哲治とは旧制福岡高校の同級生。前年の春に福高を卒業し、難関の東大法学部に入学。冬休みで小倉市内の実家（小倉市堺町一〇三）に帰省中だったのだろう。鹿児島本線の小倉―博多間の汽車の所用時間は当時は鈍行で二時間余、急行で一時間余かかったから、前日の晩から福岡市内の矢山哲治の自宅（福岡市春吉下寺町）に泊まっておけというのである。ただし、「背振山へハイキング」したかどうかは、これだけではわからないし、また参加メンバーも特定できない。なお、背振山は千メートル級の山なので、真冬に山頂まで登山したとは考えにくい。背振山方面の某所にバスで「遠足」というほうがふさわしいだろう。

〈4〉は、阿川弘之をまじえての油山への「ハイキング」（ピクニック）のことをさしているが、これがここで「八月」と判断されているのことの理由（根拠）がわからない。同書はこのあと、後年の眞鍋呉夫の小説「二十歳の周囲」に言及し、この年（昭和十五年）の四月に旧制広島高校から東大国文科に進学した同人の阿川弘之（小説中では「高瀬」）が「七月も半ばになつて（略）満洲旅行の途中この町に立ち寄る」（傍点引用者、以下同じ）というので、知友の男女相集って郊外の油山（あぶらやま）に「遠足」に出かける場面を紹介し



『改訂版 日本地理風俗大系　九州地方』誠文堂新光社

ている。眞鍋呉夫のエッセイ「つかのまの春」（『雲に鳥』日本きやらばんの会・大和美術印刷出版部、昭56・4）にも、「昭和十五年の七月中旬のある日のことであったと思う。丁度夏休みで広島に帰省していた阿川弘之から、突然、満州へ渡る途中福岡に寄る、という意味の電報が舞いこんできた」、「そこで、すでに阿川と面識のあったリーダー格の矢山哲治と相談したところ、彼を私の家へ泊め、明後日は知合の少女たちも混えて野遊びに行く予定だから一緒に来てくれ、という」、「さて、その翌々日、『こをろ』の仲間や少女達と野遊びに行った時の次第はすでに書いたことがあるから省略するが、（略）昨日のことのように鮮やかに覚えている」とあって、旧作「二十歳の周囲」のことにも言外にふれている。この「七月も半ば」「七月中旬」という眞鍋呉夫の記憶は正しく、「こおろ」（創刊号から第五号までは「こおろ」、第六号以降は「こをろ」）の「同人通信」（昭和十五年七月末か八月はじめ頃の発行、ただし復刻版『こをろ』付載「こをろ通信」には、「こおろ通信第5号―昭和十五年六月―」として一括編集されている）の「〈諸通信〉」欄に、「一、同人　阿川、小説『初恋』を携へて来博（七月十七日）満州に旅行に出る」と明記されている。「明後日」という眞鍋呉夫の記憶に大きな錯誤がないかぎり、油山への「野遊び」は七月十九日の金曜日。メンバーの学生・生徒たちは夏休み期間中であったろうし、眞鍋呉夫は前年の四月に就職した日立製作所福岡営業所を一年後の十五年春に退職していたから、平日でも時間の都合はついたろう。かりに「明後日」という記憶があと一、二日ずれていたら、二十日の土曜日か二十一日の日曜日ということになる。なお、松原一枝『お前よ美しくあれと声がする』は、阿川弘

之が大連(満洲)からの帰途に福岡に立ち寄って仲間と油山へ行ったのは「八月」だと書いている。前期「〈諸通信〉」欄に、阿川弘之が「来博(七月十七日)」し、「満州に旅行に出る」としか書いていないことからすれば、この可能性もないわけではない。もし「満州」へ向かう途中に油山に出かけたのであれば、このことが「〈諸通信〉」欄に報告されていてもいいからである。

〈5〉は、矢山哲治の昭和16・8・3鳥井平一宛書簡(絵はがき)に、「六日の朝八時半、住吉宮前池畔のバスで、筑紫耶馬渓に皆ゆくさうですから、私の妹もゆくし、安永嬢が幹事ださうですから、繰合せて出て下さい。／お願ひ。」とあるのだが、この「六日」の予定が「下旬」(近藤洋太)まで延期されたかどうかはわからない。ただ、山崎邦栄アルバムには、この耶馬渓行きの際の写真が残されているので、実施されたことは確認できるし、そこには鳥井平一や眞鍋呉夫らの顔も写っている。なお、「筑紫郡耶馬渓」ではなく「筑紫耶馬渓」が正しい。

〈6〉は、矢山哲治がエッセイ「栞草」(「芝火」昭17・1)に、「数日前の日曜、女友達をまじへたグルツペで、海や空港を見晴す暖い城蹟の丘陵に遠足をした。彼女達が私達の送別をしてくれたわけです。いろんなことが間近なので。／山頂の芝生で焚火などしてから、彼女達は千代紙の小冊子をめいめい取出して思ひがけぬ贈物をしてくれた。」云々と書き、また昭和16・11・13鳥井平一宛書簡(封書)に、「〇日曜、立花山の方へピクニツクした。娘達は、岸田國士の落葉日記を朗読した。愉しかつた。私はあとで花がたみをよんだ。夜になつて考へると、あのひと達のきれいなことがよくわかつた。その晩がいちばん愉しかつた。」と報告しているそれである。近藤洋太は「上旬」としか書いていないが、この書簡の日付以前の「日曜」は九日なので、この日であったろう(矢山哲治はこの月の一日から四日まで熊本・長崎方面に旅行しているので、二日の日曜日の可能性はない)。

以上の〈1〉〜〈6〉のほかにも、「野遊び」(ピクニック・遠足)の実行は、推定ないし確認できないのではない。以下、いくつか列挙しておこう。

〈i〉 昭和十五年八月十一日(日) 糸島郡長垂・今宿へ同人遠足会。※前記「同人通信」に、「◎同人遠足会 八月十一日(日)午前十時今川橋集合、長垂、今宿附近行楽。べんとう、海水着持参。もし雨天ならば次の日曜日とす。在福同人は勿論、久留米、小倉其他よりも来て下さい。」とある。この日に実施されたかどうかは未確認。

〈ii〉 昭和十五年十一月初旬、若杉山へハイキング。※眞鍋呉夫の小説「美しかつた日に」(『二十歳の周囲』全国書房、昭24・6)に、「十一月の初め、自分達は若杉山に登つた。矢ケ崎や喬枝は恰度上京中でゐなかつた」とある。矢山哲治は昭和十五年十一月三日に上京し、十日に帰福しているので、この間のことだったろう。

〈iii〉 昭和十六年三月二日(日) 奈多へピクニック。※矢山哲治の昭和16・3・8鳥井平一・佐藤昌康宛書簡(絵はがき)に、「先の日曜、奈多で、たのしかつた。嘘ではないが、あんなに気持よかつたのは始めて。この頃、妙子さんも邦歌も皆なかなかいゝ。」とある。

〈ⅳ〉昭和十六年六月二十二日（日）　在京の鈴木真の来福を迎えて油山へピクニック。※矢山哲治の昭和16・6・23吉岡達宛書簡（封書）に、「昨日は娘達（常会の諸嬢）と、こをろの友達の有志が、鈴木真の来福を機に油山にいつた。私は屋形原の山火事の調査があつて参加できなかつたが、夕方、黒門で逢つて時局のことをいろいろ話しました」とある。

〈ⅴ〉昭和十六年七月下旬か八月上旬　島尾敏雄の末妹雅江を迎えて油山へピクニック。※山崎邦栄アルバムにこの折の写真が何枚も残されており、「油山　瓢ちやん兄妹を迎えて」の紙片（ただし後年のもの）が貼付してある。島尾敏雄年譜によると、島尾敏雄が末妹の雅江（大正十一年生まれ。神戸女学院卒）をつれて、満洲奉天の医者の原氏に嫁いだ上の妹の美江のもとを訪ねたのは昭和十六年の夏（あるいは八月）のこと。この奉天行きの前に福岡市に立ち寄ったのだろう。

以上をまとめて、ここで一覧しておこう。（なお、ここでは行楽地の地形・状況などを勘案して、「ハイキング」「ピクニック」「遠足」などと適宜名づけておく）。

〈1〉十四年八月一日（※日付未確認）　名島へ海水浴
〈2〉十四年八月二十一日　長垂（ながたれ）海岸へ海水浴
〈3〉十五年一月六日　背振山方面へ遠足
〈4〉十五年八月（※七月中旬か）　阿川弘之を迎えて油山へピクニック
〈ⅰ〉昭和十五年八月十一日　長垂・今宿へ同人遠足会（※予定）
〈ⅱ〉昭和十五年十一月初旬、若杉山へハイキング
〈ⅲ〉昭和十六年三月二日　奈多へピクニック
〈ⅳ〉昭和十六年六月二十二日　鈴木真を迎えて油山へピクニック
〈ⅴ〉昭和十六年七月下旬か八月上旬　島尾兄妹を迎えて油山へピクニック
〈5〉十六年八月下旬（※六日か）　筑紫耶馬渓へピクニック
〈6〉十六年十一月上旬（※九日）　立花山へハイキング

これ以外にも、山崎邦栄アルバムには、「福間近くの海岸／古賀？」、「眞鍋家附近」と書いた紙片が貼付してある。後者は眞鍋呉夫の小説「二十歳の周囲」に描かれている、昭和十五年「九月も半ばに入つ」た頃に高宮の眞鍋呉夫の自宅に近い丘の上の住宅地に住む「新田年子」（廣瀬信子か）の結婚お別れ会の折のものだろう。このほか、眞鍋呉夫が出征（昭和十七年五月）する前のお別れ油山ピクニックの写真も残されている。どの写真にも楽しそうな若者たちの笑顔がこぼれている。

ちなみに、これは「こをろ」の男女グループとは違うが、矢山哲治が誘って松原一枝と赤塚夏樹（九大工学部）との三人で、昭和十三年十一月上旬に太宰府天満宮の裏手の宝満山にハイキングに出かけている。このことは矢山哲治の昭和13・11・9川上一雄宛書簡（封書）に、「日曜、百田が、夜来たが何分、俺は松原一枝などと宝満にでかけて、すこし帰宅をおくらして、逃してしまつた」とあり、これが十一月六日の日曜日だったことがわかる。ちなみに、これを題材にした矢山哲治の小説「十二月」（「こをろ」

8、昭16・8）では、これを「十一月三日、明治節」の日の出来事としており、後年の松原一枝の伝記小説『お前よ美しくあれと声がする』も、これをふまえて「矢山が仏語講習会の帰りに提案したハイキングは十一月三日の明治節ときまり、三人は宝満山に登った」と書いている。

地誌

福岡市（ふくおかし）　「福岡県の西北部を占め南部に油山（六九二米（ママ））ありて漸次北部に低く、北は博多湾に臨んで地勢概ね平坦、市街は那珂川に依つて二部に区分され、河東を博多、河西を福岡と称してゐる。北には門司・小倉等の商工業地を控へ、南は筑紫平野に通ずる交通上の要地に当り、殷賑なること九州随一の地である。人工は二十九万一千六百、博多織・博多人形・高取焼・筑前琵琶・平助筆などの産出が多い。／博多は古の那大津（ナノオホツ）でもと本邦三津の一に数へられ、支那貿易の市場としてその名は古くから海外に迄聞え、殊に太宰府に近い要衝に当つてゐたので、守護職を置いて外敵防禦の要地となつてゐた。福岡は往昔警固村の海浜にあつた福崎の地で、慶長五年、関ケ原の役後、黒田長政筑前五十二万三千余石の太守に封ぜられて入国してからその城下町として発展し、古い博多の商業地と相対立するに至つた。が明治十一年両者を合併して福岡市と称するに至つた。いま県治及学問の中心地となり、各種官公署・兵営・九州帝国大学が置かれてゐる」（日本旅行協会編・発行『旅程と費用概算』発売＝博文館、昭14・10第二十七版）。

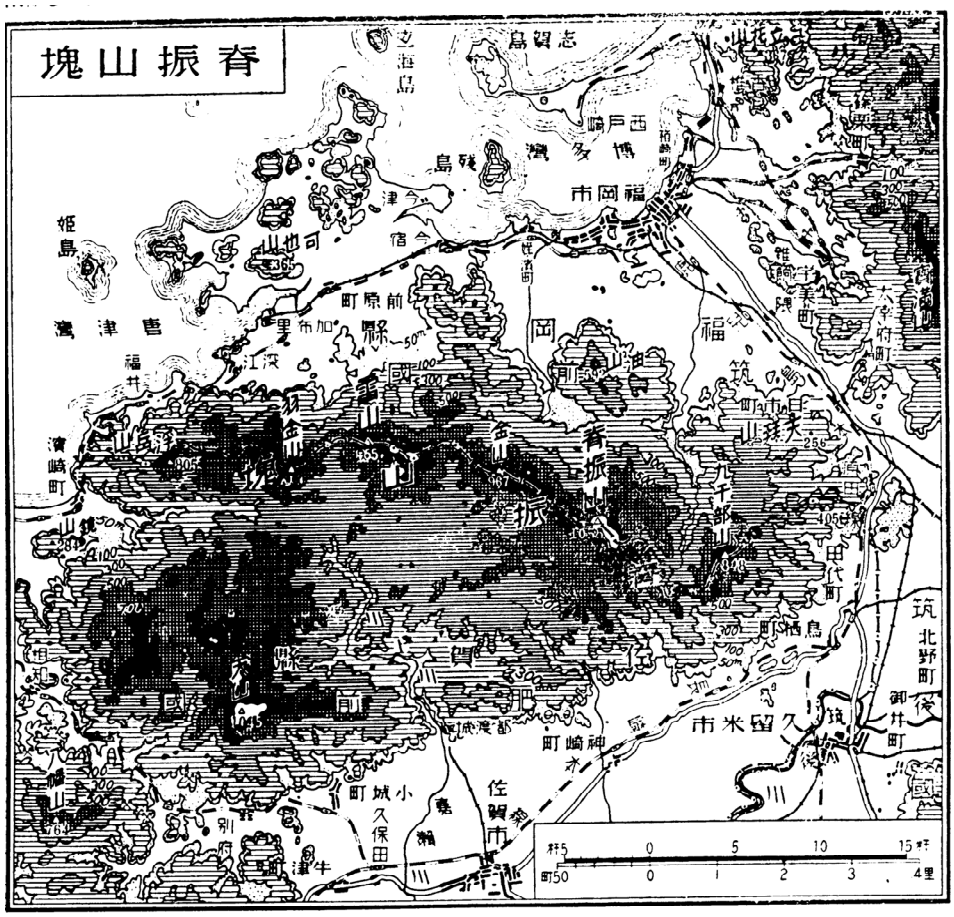
名島（なじま）　名島は最初は名島村、昭和二十五年以降は糟屋（かすや）郡多々良（たたら）町大字名島、三十年に福岡市に編入。多々良川の河口に位置し、古来は小半島だったが、現在は隣接海域の埋め立てで平坦な海岸線になっている。天正十五（一五八七）年、小早川隆景が島津征伐の功績により筑前国に入国し、ここにあった立花家の支城を改修して居城としたが、関ヶ原の役後は小早川家は備前岡山に移封、かわって黒田長政が入国し、その後に福岡に築城して移ったため、さびれた。大正九年六月、東洋一の名島火力発電所（現在の九州電力㈱の前身の一）が創業。昭和五年三月、名島水上飛行場が開港。風光明媚な景観を保ち、名島の夕照で知られる景勝の地であった。河口岸に、神功皇后が「新羅征伐」より凱旋した折の船の帆柱が化石化したと伝えられる硅化木の「帆柱石」が祀られている。『改訂版　日本地理風俗大系　九州地方』（誠文堂新光社、昭11・8）にいわく、「名にし負ふ多々良川の右岸の河口に近い小早川氏の旧城址を存する名島はこゝである。遙かかなたに、海の中道を望見し、奈多の浜から志賀の島につらなる三里の砂洲には、松がなびいて景色も極めてよい」（原文総ルビ）。近藤洋太『矢山哲治』によると、矢山哲治や山崎邦栄らの男女グループは「新博多駅」で集合して出かけている。当時は市内電車の電停「新博多駅前」があった。「新博多」駅は博多湾鉄道（明治四十一年十二月、博多湾鉄道㈱として創業し、大正九年四月、博多湾鉄道汽船㈱と社名変更、昭和十七年九月、九州電気軌道㈱・福博電気軌道㈱他と合併して西日本鉄道㈱、現在の西鉄宮地嶽線の前身）の始発駅で、市内の石堂川の河口近く

の東側（九大医学部側）に駅舎があった。「新博多」を出発後、海岸の松原沿いに、「箱崎宮前」、「箱崎松原」、「名島」とつづき、「宮地嶽」駅が終点（現在は「津屋崎」駅が終点）。なお、帝大前から名島行きのバス路線もあった。

長垂（ながたれ）・今宿（いまじゅく）　福岡市西方の海浜の地。福岡市から西方の唐津（からつ）方面に向かうと、白砂青松の「生（いき）の松原」があり、これを抜けると今津（いまづ）湾に面する長垂海岸、ついで今宿海岸があり、戦前から海水浴場として有名だった。今宿は明治二十九年に糸島郡今宿村、昭和十六年に福岡市に編入。伊藤野枝の郷里である。矢山哲治らのメンバーは、前述したとおり昭和十四年八月二十一日　長垂海岸へ海水浴に行き、翌十五年にも、「八月十一日（日）午前十時今川橋集合、長垂、今宿附近行楽」との計画を立てている。ここに「今川橋集合」とあるのは、市内の今川橋から糸島郡各地に連絡するバス路線があったからである（「最新福岡市地図」裏面案内文、福岡協和会、昭17・6）。

若杉山（わかすぎやま）　糟屋郡篠栗（ささぐり）町と須恵（すえ）町との境に位置する標高六八一メートルの霊山。麓一帯には篠栗新四国四十八箇所霊場の札所が点在し、西側中腹には若杉楽園、北側の荒田高原には旅館やキャンプ場がある。「**イ　一日行程　徒歩十一粁　一般家族向**／篠栗駅―（一時間）―荒田―（一時間）―若杉山―（三十分）―若杉楽園―（一時間）―篠栗駅／山腹荒田までは自動車の通ずる参道があり、荒田には巡礼者の宿屋や茶店がある。これより老杉の間を縫つて山頂に達する。太祖神社があり近くに茶店もある。奥之院は茶店の前の断崖に出て針の耳岩を下る。堂宇の傍に独銛水と称する湧水がある。／山頂から西へ下ると古堂に養老の滝があり若杉楽園に至る。これより自動車の通ずる道を篠栗駅に出る。／**ロ　一日行程　徒歩十二粁　一般家族向**／篠栗駅―（二時間）―若杉山頂―（一時間）―ショーケ越―（一時間）―二瀬川―バス―飯塚／若杉山頂の茶店の前から尾根を東へ行くと防火線の緩い下りで、ショーケ越岐路には指導標があり、右へ折れて小径を下ればショーケ越に至る。宇美と二瀬川に通ずる峠で、左へ下れば二瀬川に至る」（『北九州ハイキング案内　附九州著名山地コース』）。山崎邦栄アルバムの若杉山での写真には島尾敏雄、眞鍋呉夫、山崎邦栄、寺野久子、秋根美代子、久我正子らが写っている。眞鍋呉夫の小説「二十歳の周囲」によって一行の行程をたどると、吉塚駅から篠栗線の汽車に乗って終点の篠栗駅で下車。車内の草履ばきの遍路の老人たちも降りて、互いに呼びかっている。アスファルトの道路に出て、新道ら右に折れて登り口にさしかかった。初子（久我正子）は「白のジャケツに格子縞の吊スカートを着、赤いベレー帽を被つてゐた。パーマネントがやつと身についてきたといふ感じだ」。中腹まで幅のひろい登山道をのぼったあと、ためしに近道を選んで、迷いながら歩きつづけると不意に視界がひらけて頂上がすぐ近くに見えた。「自分達が出たのは尾根の防火線であつた。木立を切り払つた約二米幅の芝草の道が、なだらかに頂上へうねつてゐる」。「登り道に随分と暇どつたので頂上に着いた時にはもう日が翳つた。神社の傍の杉木立の中で飯わ炊いた。／帰り道の中途で日が暮れた。自分達は次第に濃くなつていく星空の下を、二組に分かれて腕を組みながら、今度は広い道を急ぎ足で下つた」。

奈多　福岡市東部の和白から志賀島に至る半島の途中に位置する海浜の地。明治二十二年、和白村の一部。昭和二十九年、和白町、三十五年、福岡市に。風光明媚な海浜地として有名。宇美―雁ノ巣間を結ぶ鉄道路線（博多湾鉄道、現在のＪＲ宇美線）があり、昭和十一年六月、東洋一の規模を誇る民間の雁ノ巣飛行場が誕生した。この奈多には、女性グループの一員だった廣瀬信子家の別荘があり、山崎邦栄アルバムには、この奈多の廣瀬家別荘で撮った梶本富子（愛称トンコ）のお別れ会の写真が何枚も残されている（ただし、このお別れ会は女性たちだけの集まりであったようだ）。



（『改訂版　日本地理風俗大系　九州地方』誠文堂新光社）

背振山　福岡市中央部から南郊を眺めると小高い油山があり、背後に背振山地が左右に雄大にひろがっている。中心峯は背振山（標高一、〇五五メートル）。山地へは七曲峠、三瀬峠、長野峠越えの道路が通じている。「筑紫山脈中部区域即ち背振山塊は、筑紫山門を隔てて前記筑豊山塊に隣するほゞ平行四辺形に近い、大部分花崗岩からなる地塊山地である。（略）／背振山塊の中央を東西より東微南に筑前、肥前の国境を為して弧状に走る背振山塊がある。羽金山、雷　山、金山、背振山は七〇〇乃至一、〇〇〇メートルの海抜高距を有し、脊梁の南側は傾斜が著しく急で弧状の断層崖を成すものである。山塊の西南部には天山、彦岳等の山彙があり、高距八〇〇乃至一、〇〇〇メートルである」（『改訂版　日本地理風俗大系　九州地方』誠文堂新光社、昭11・8、原文総ルビ、なお「雷山」は「らいざん」と読むのが正しい）。『北九州ハイキング案内　附九州著名山地コース』では、「脊振山」はハイキング・コースではなく登山コースとして紹介されている。「博多駅（電車）今川橋＝椎原―荒谷―板屋峠―頂上―鬼ケ鼻―椎原往路に同じ（又は頂上より佐賀県側神埼駅に出るコース）／此の連峯中には雷山、金山、三瀬峠

等の名峯、峠連なり縦走コースとして興味多いものがある」（文中、「＝」は「自動車の通ふ道」、「―」は「県道又は村道」）。橋本敏夫編『日本山嶽短歌集』（交蘭社、昭10・10）は、「不知火の国のさかひにうるはしき背振の山は暖かに見ゆ」（長塚節）、「柿もぐと樹にのぼりたる日和なりはろばろとして背振山見ゆ」（中島哀浪）、「しばしばも朝明より来し冬時雨峡深く来て路は泥濘るむ」（青井禊）の三首を採録している。

油山（あぶらやま）　福岡市の南西部に位置する山で、標高は五九七メートル。現在は「油山市民の森」として整備されている。中腹には「油山観音」と通称される東油山正覚寺（しょうがくじ）があり、本尊は正覚寺聖観音座像（重要文化財）。寺伝によると天平年間（七二九―七四八）に唐僧の清賀上人の開基に始まり、山の東西には各三六〇の僧坊があったという。日本旅行協会編・発行『旅程と費用概算』（発売＝博文館、昭14・10第二十七版）には、「▲油山（アブラヤマ）　市の南郊にある霊山で、市電黒門から山麓油山まで二四銭（六粁七）、夫から観音、頂上駄ケ原を経て東油山迄一巡六粁五。国宝安置の観音堂及び林泉の美を占め、市内唯一の森林公園として目下開拓中である。」とある。この油山観音堂は俳人の種田山頭火も訪ねている。さきにふれたとおり、眞鍋呉夫の後年の小説「二十歳の周囲」は、「こをろ」同人の阿川弘之を迎えて男女のグループで油山に「遠足」に出かけた出来事を描いている。「黒門にバスの発着所があるの、知ってるだろう」／「うん」／「あそこに九時までに集まるんださうだ。バスは九時半頃出るらしい」。以下、小説には、こう書かれている。「その朝、高瀬と一緒に黒門で電車を降りると、バスの待合所では、既に数人の少女が小さなバスケットを手に手に、肩をぶつつけ合うやうにして笑い興じてゐた。高瀬は去年の夏、一度少女と野遊びをした事があるといふことで、直ぐ彼女らの仲間に入つた。（略）／やがて、矢ケ崎も笑ひながら電車から降りてきた。結局、少女達が十人ばかりと、男の子が六人余の同勢になつた」。ここに「高瀬」とあるのは阿川弘之のこと。また、市内の「黒門」に油山行きのバスの発着所があるというのも、じっさいのことである。さらに小説の筋をたどっておくとバスが集落を抜けて青田の道に出ると、誰かが歌いはじめ、すぐに合唱になった。「麓の雑貨屋の前でバスを降りた。バスはすぐ傍の火葬場まで行つて折り返すといふ事であつた」。この火葬場は現在も現地にある。雑木林の登山道を登つめると、「とつつきの二軒茶屋は、雨戸を閉ざして人の気配もなかつた」。「その前を透り抜け、苔むした石段を登つてい」くと、「起伏の激しい参道の奥に更に石段があつて、若葉洩れに寺の本堂が見えた」。油山観音（正覚寺）のことであろう。「自分達は杉木立を抜けて又少し登つた。五分ほどゆくと、本堂の屋根を斜めに見下す位置に遊園地風の平地が開けた。錆びた鉄製のシーソーが、半ば土に埋れてゐた。／平地の上に、板敷の露台を突き出したバンガロー風の茶屋がある。文江が番人に交渉して、そこを借りた。八畳三部屋の広さで、襖を取り払い、風がよく通つた」。それから下の平地に戻って、男女一緒に「アベツク鬼ごつこといふ遊び」や「花一匁」をやり、「自分達は日の薄れるのも忘れて、夕方まで遊んだ」。この小説中の「初子」こと久我正子と眞鍋呉夫は後年、結婚している。久我正子の家は市内黒門にあった和菓子

屋「江戸屋」で、油山観音の傍に日本式庭園のある別荘「山水紅園」を所有していたという（ちなみに、山崎邦栄アルバムを見ると、島尾兄妹歓迎の油山ピクニックと眞鍋呉夫出征前のお別れピクニックの二回とも「山水紅園」で遊んでいると知れるが、阿川弘之歓迎のピクニックは写真が見あたらない）。

筑紫耶馬渓　『角川地名大辞典40 福岡県』（角川書店、昭63・3）の「筑紫耶馬渓」の項によると「筑紫郡那珂川町市瀬にある那珂川の渓谷。釣垂つだる峡ともいう。町の南部、那珂川の上流部に位置し、釣垂橋付近から下流中原なかばるの南畑発電所まで約1km続く。筑紫耶馬渓の名は、昭和25年西鉄バス停名に筑紫耶馬渓口を用いたことに始まる。佐賀県境の背振山に源を発する那珂川が、花崗岩台地を開析してできた峡谷で、河床には多くの甌穴が分布し、軽石や両岸の白い奇岩・怪石、樹林、清流で知られる。」云々と記載しているが、「筑紫耶馬渓の名は、昭和25年西鉄バス停名に筑紫耶馬渓口を用いたことに始まる」というのは、さきの矢山哲治の昭和16・8・3鳥井平一宛書簡に「筑紫耶馬渓」と見えているので、誤記である。大分県の名勝、耶馬渓を模しての命名である。山崎邦栄アルバムには、ここで撮った写真が何葉もあり、渓流の岩場に座った鳥井平一や眞鍋呉夫や水着姿の少女たちが談笑している。

立花山　「福岡市東区と粕屋郡新宮町・久山町の境界にある山。古くは二神山といい、伊邪那岐・伊邪那美の2神を祀る霊峰。標高367・1m。花崗閃緑岩からなり、照葉樹林に覆われる。新宮町立花口の明鏡院独銛寺の薬師堂のかたわらに樒1株があり、伝教大師（最澄）が突き立てた杖が枝根繁茂して開花したとの口伝があり、山名の由来となった」（『角川地名大辞典40 福岡県』）。「筑前の国香椎の東北約四キロばかりの地に坐する立花山はその海抜高度三〇七メートルに達しその頂は七峯に分れてゐる。全山暖帯樹種が著しくよく繁茂し欝蒼たる密林をなしてゐる。それ等発育のよい巨木の中でも天然性の樟樹は最も見事であり有名でもある。またこの山頂はその眺望が極めて広闊で中にも奈多の浜・志賀島・海の中道など一と目に見渡され筆紙に尽し難い景観をなす。」（『改訂版 日本地理風俗大系　九州地方』誠文堂新光社、昭11・8）

宝満山　「【竈門神社】（官幣小社）福岡県筑紫郡太宰府町内山。二日市駅から五粁。貸切一円半。太宰府神社から東北約一粁。玉依姫を祀り、上宮と下宮とある。下宮は竈門山（宝満山）山麓にあり、上宮は急坂約三粁を上つた宝満山々頂の大盤石の上に鎮座してゐる。例祭十一月十五日。（略）／宝満山は一名を竈門山と云ひ、伝説と史実に富んだ名山である。山頂は二峰から成り、奥宮の背後にある物見岩は好き眺望台である。こゝから峰伝ひに三郡山・砥石・若杉を経て篠栗に下りる三郡山塊の縦走は一日行程の興味ある徒歩旅行である」（日本旅行協会編・発行『旅程と費用概算』発売＝博文館、昭14・10第二十七版）。

友達

矢山哲治の第二詩集『友達』（詩集友達刊行会、昭15・9）は帙入り和紙の贅沢な造本で、見開き頁ごとに一篇の詩が置かれてい

『改訂版 日本地理風俗大系　九州地方』誠文堂新光社

る。書き下ろしの連作詩で、全八篇、各詩にタイトルはない。二番目の詩は「観音のある山」、すなわち油山へのピクニックを題材としている。

観音のあるこの山は深いが
ぼく達の心ほどに高くはない
杉木立のしたを踏んで

料金のかからない水音を聴いた
山荘の露台に立つと
椿の葉もれを娘達の色彩がゆるる
まはる跳び綱にすくはれて
息のひとりは激しく地に倒れた

ああ　この心象を何処におかうか
散文には描けないことだし
乾板へ写せるとは信じられない
ただ　ぼく達の若いいぶきが触れただけ

ごらん　越えてきた麓の方を
七つの森と青い海に抱かれた輝く都市
唄はう　美しいこの地方に育つたと
父母のくださつた健康と精神と

ここに「山荘の露台」とあるのは、あるいは「山水紅園」のこ

とか。「椿」は、油山観音（正覚寺）開基の清賀上人が椿の種子（一説に胡麻とも）から油を絞り、糸島の諸寺に灯火油としておくった故事から「油山」とよばれるようになったという地名伝説を連想させるが、この詩のモチーフとは直接には関係ない。「息」は子息・息女の意。集団縄跳びをしていて、誰かが綱に足をかけて地面に倒れたというのである。さきの眞鍋呉夫の「二十歳の周囲」に、「本堂の屋根を斜めに見下す位置に遊園地風の平地が開けた。錆びた鉄製のシーソーが、半ば土に埋れてゐた。／平地の上に、板敷の露台を突き出したバンガロー風の茶屋がある」と描かれていた、この「露台」であり、「遊園地風の平地」での光景である。「七つの森」という「七つ」は具体的な数字ではなかろう。博多湾沿いにひろがる福岡市を遠くとり囲んで並んでいる、彼らに親しい立花山、宝満山、若杉山、油山、そして背振山地の山々をさしている。

いつの時代にもありそうな青春の抒情詩と見える。けれども、個々の抒情詩は個々の時代思潮と無関係には誕生しない。この詩の場合、同時代精神の痕跡を示すのは、最終連の「美しいこの地方」であり、「父母の下さつた健康と精神」であろう。

矢山哲治は「こをろ」改組の際に、「解散提案者の動機その他について」と題する文章をガリ版刷りの同人会報「こをろ通信」第9号（昭15・12）に執筆し、あらためて創刊当初の趣旨を訴えている。

> 創刊の主唱者である私は、私達だけの精神的、文化的気圏をつくりたかつた。さういふ私達だけに意味のある発表機関を持ちたかつた。「作品」以前の私達の生活の雰囲気、向上的な私達の生活を生かす、私達の自由な、自治的な団体と機関誌を持ちたかつた。それが「こをろ」といふ小集団の意味だつた。同人雑誌「こをろ」の維持のための集団ではなかつた。すくなくとも、私にあつては雑誌「こをろ」を維持することを窮極目的としての集団ではなかつた。

これはほとんど、いわゆる精神共同体の形成を企図するという意味で、戦後に谷川雁が筑豊炭鉱地帯で結成した「サークル村」の組織論に似ている。「こをろ」という組織体（精神紐帯）があって、しかるのち「こをろ」という雑誌があるのであって、けっしてその逆ではない。この一文で矢山哲治は、こういう創刊趣旨が一年たっても「徹底」される気配がないので、いったん解散しようと持ちかけている。

さんざんもめたようだが、けっきょく「こをろ」は年末に解散し、翌年、再組織して第二期創刊号（通巻第六号、昭16・3）を出している。同人数はぐっと減った。この新生号に矢山哲治は「友達」と題する一文を発表し、こうよびかけている。

> 私達は、もともと何一つ身につけて生れては来なかつた。失ふことを恐れ、惜しむべきものに、私達を装ふ数多い何物すら値しないことを、今日にはいつそう知るべきだつた。私達を、私達であらしめるものは、いつたい何であらうか。私達を、私達の位置に在らしめるものは――私達の「場」において、限りなく繰返へされる私達の「個性」の発見！　この

個性がかへつて私達の場を支へてゐるのだ。私達に共通の部分が、相似点があるからだなどと殊更らしく云ふなら、愚しいかぎりだ。何故と云つて、目鼻立ち揃つてゐるといふ指摘から、さほど遠くない思ひつきではないか。「友達」とは、けつして合言葉ではない。

私達が風土を同じくし、また、歴史を、文化を、そうじて環境をといふことも、確かに事実である。しかし、それが決定的ではなかつた。風土すら、私達に捕へられ培はれてゆく、私達が私達の内部に発見してゆく風土を云ふべきだつたから。

この一文のキーワードは「場」と「内部」である。あらかじめ個々の「私」が単独に存在し、そしてお互いに「相似点」があるという理由から「私達」と複数形でよぶのではない。個々の「私」の交歓の「場」が、「私達」としての「私」を形成し、この「私」がまた「私達」を形成する。この不断の運動によって「個性」を遂行的に「発見」させる。「歴史」や「風土」や「環境」も、このような「私達の内部」の作用を離れてあるのではない。これらは相互作用的に現前する光景だというのである。

これよりすこし前、堀辰雄は『風立ちぬ』(野田書房、昭13・4)のなかに、サナトリウムで暮らしはじめた「私達」が眼前の遠い風景に「異様な美しさ」を感じる場面を描いている。

そんな或る夕暮、私はバルコンから、そして節子はベッドの上から、同じやうに、向ふの山の背に入つて間もない夕日を受けて、そのあたりの山だの丘だの松林だの山畑だのが、半ば鮮かな茜色を帯びながら、半ばまだ不確かなやうな鼠色に徐々に侵され出してゐるのを、うつとりとして眺めてゐた。ときどき思ひ出したやうにその森の上へ小鳥たちが抛物線を描いて飛び上つた。(略)

それからまた私達はしばらく無言のまま、再び同じ風景に見入つてゐた。が、そのうちに私は不意になんだか、かうやつてうつとりとそれに見入つてゐるのが自分であるやうな自分でないやうな、変に茫漠とした、取りとめのない、そしてそれが何んとなく苦しいやうな感じさへして来た。そのとき私は自分の背後で深い息のやうなものを聞いたやうな気がした。が、それがまた自分のだつたやうな気もされた。

このときの「私」は「私」でなく、「節子」も「節子」でなく、「私達」としての「私」である。いつまでもこうしてはいられない「私達」が、眼前の風景に異様な美しさを感知する。

「ごらん　越えてきた麓の方を」と矢山哲治がうたうとき、彼は過ぎこし彼方をふりかえり、いつまでもこうしてはいられない時代の宿命を知らされている。「青春というもの」は、と長田弘は『困難な時代の詩人—鮎川信夫論断章』(ゴルゴオン社、昭46・7)に書いている。「いわば時代体験のメタフィジックスをなにより苛酷に生きなければならない」。矢山哲治の詩が、「ごらん」とよびかけるのは、「私達」としての「私」である。この「私」は、眼前の風景とも交歓している。